

2023年7月の総評：木下龍也

## 喪った恋には恋で蓋をする

### それらを貫いていく背骨／汐見りら

「喪った」と書かれてあるということは、主体は恋人を亡くしたのかもしれない。「蓋」「骨」の文字から連想できるのは骨壺だ。骨壺は実際に「蓋」で閉じることができる。けれど、これで終わりというふうにはできないため、別の「恋」をすることで主体は「喪った恋」に区切りをつける。火葬され、溶けて、ぼらぼらになった恋人の「骨」を見て、主体は自分の「背骨」を意識した。身体は自分である程度作り変えることができるが、骨は変えられない。喪った「恋」をしていたときと同じ「背骨」で、別の「恋」を生きていかなければならない。「背骨」は体重を支えるための重要な骨だ。「貫いていく」ためには曲がってはいはならない。立ってられないくらいの悲しみのなかで、それでも、まっすぐであろうと、強くであろうとする切ない主体が見える。

## 夜学から帰れば母はおかえりと

### ゾンビのように毛布をはらう／松下誠一

例えば、この短歌の登場人物が「母」と子ではなく、同棲したての恋人同士であれば「ゾンビのように」という比喩は出てこなかっただろう。きっと愛の新鮮さに慄き、ありがたいとかいとおしいとかそういう感情に支配され、「ゾンビ」みたいだなあ、とは思えない。「ゾンビのように」という比喩は愛が生活に馴染んだ上で、やっと生まれる表現だ。人間は慣れる生き物で、幼い頃から「母」の愛を受け続けていれば、ありがたいとかいとおしいという感情が消えてしまうわけではないけれども小さくなる。けれど、眠っていたのにわざわざ起きて「おかえり」と声をかけてくれるのはどんな関係においても紛れもなく愛だろう。「ゾンビのように」とい

う比喻は、なぜ「ゾンビのように」と書けるのか、というかたちで、日常に埋もれてしまった愛を掘り起こし、目の前に蘇らせてくれた。

たいていのことは

どうにかしてくれる

居間の箆笥の上のファービー／永山逢海

日本では1999年5月29日に発売され、爆発的に流行したペットロボットの「ファービー」。この短歌の「ファービー」がどのモデルのものかはわからないが、最新型はAmazonなどで販売されているため、現在のご家庭にあっても不思議ではない。置かれたその場から動かず、耳やまぶたを動かしたり、身体を揺らしたり、数百の言葉をしゃべるといった設定は変わらないようで、最新型だとしても「たいていのこと」に含まれそうな家事や育児、役所の手続き、メールの返信などをしてくれるわけではないようだ。だから主体にとっての「ファービー」は、直接手を貸してくれるわけではなくても、問題を「どうにかして」いるのは自分であっても、「どうにかしてくれ」た、と思えるような信仰の対象なのだろう。神様のようなものかもしれない。だから地上からすこし離れた「居間の箆笥の上」に存在しているのだ。「ファービー」が「どうにかしてくれる」生活がいつまでも続くことを願う。

上の橋を二台の自転車は渡り川に

落ちやすい方がはやかった／志内悠真

「上の橋を／二台の自転／車は渡り／川に落ちやすい／方がはやかった」と切れれば、67588で読むことができる。定型は57577であるから、字余りの初句、四句、結句は読むスピードが上がる。下句は切らずに早口のまま読めそうである。また「自転／車は」という句跨りは読むスピードを通常よりも落とさせる。なので緩急で言えば、急緩急急急という短歌である。なぜこうなっているのか。まず「上

の橋」ってなんだろうと思ってググったら神奈川県川崎市や岩手県盛岡市にある橋の名称らしい。初句の急はこのなんだろうをすっ飛ばすようなスピードだ。二句三句の句跨りを伴う緩緩は読者を「二台の自転車」に注目させる。四句結句の急急はその自転車のスピードを再現しているようにも思える。変則的なリズムで結句まで連れてこられて思うのは、「川に落ちやすい方がはやかった」という検証結果は社会的には無価値である、ということだ。「はや」い「方が」「川に落ちやす」「かった」なら価値がある。どちらが事故を起こしやすいか、という実験だ。ギアを上げた「方がはやかった」なら価値がある。ギアの性能テストだ。けれど「川に落ちやすい方がはやかった」は無価値だ。スピードを上げればコントロールが難しくなるという当然のことしか導いてないからだ。だからこそ、短歌にしたのだろう。社会的には無価値な発見こそ、まだ誰も書いておらず、誰も書いていないからこそ、頭一つ抜けた短歌になるのだ。

## 特売のたまごの殻のそばかすと

### 心を通わせたくて雷雨／マズルカ

卵殻斑点卵。スーパーなどで「そばかす」模様の赤玉を目にしたことのある方も多いのではないだろうか。考えたいのはあの「そばかす」に「心」はあるだろうか、ということだ。キウイが歌う時代である。「特売のたまご」にだって「心」はあるだろう。「殻」はどうだろう。人間で言えば肌だ。肌に「心」を見出すのは難しいかもしれない。であれば、その表面にある「そばかす」はもっと難しい。ではなぜ「たまご」と、ではなく「そばかすと」なのだろう。おそらく「特売のたまご」「殻」「そばかす」のなかで、「心」があるかどうかすらわからない「そばかす」が最も「心を通わせ」にくいものだからだ。「通わせ」にくいものとあえて「通わせ」ようとしているのではないだろうか。結句の「雷雨」は主体が「そばかす」と「心を通わせ」るためにはもってこいの天候だ。周りの景色や音を「雷雨」によって通常よりも不明瞭にし、主体と「そばかす」だけの世界が作りだされるからだ。「そばかす」に「心」を見出し、どうにか繋がろうとする。が、なぜそうしたいの

か、というのはわからなかった。いくつかの理由を考えてみても推測の域を出ない。何をしているかはわかる。なぜそうしているかがわからない。困った。けれど現実ってこうだよなとも思う。動機は本人にしかわからない。伏せられているWhyに「心」を惹かれる1首だった。「特売のたまご」→「殻」→「そばかす」と徐々に焦点を絞り、結句で一気に「雷雨」の風景が映される。このカメラワークも見事だ。

## 片足に重心かけてハム切って

### 麺をだるだる茹でる真夏日／うろ仔

暑くて食欲がない。けれど何か食べなくてはならない。(家族がいれば)食べさせなくてはならない。だから、何か。そうだ、つるんといけそうな冷やし中華はどうだろう。冷蔵庫に「麺」がある。でも面倒くさい。思いついただけでも褒めてくれ。寝ていたい。動きたくない。うーん、なんとか「ハム」だけは添えよう。「真夏日」でただでさえ暑いのに、「麺」なんて「茹で」たくない。でも何か食べなくては。食べさせなくては。ああ、湯気でさらに暑い。こぼこぼ、ぶくぶく、ふつふつというオノマトペを「だるだる」に変換してしまうほど暑い。そんな「だる」さが1首全体から滲み出ている。「片足に重心かけて」という少しでも楽な姿勢で、なんとか料理に取り組む姿勢の描写が現実的すばらしい。

## 足音で

### わたしはわたしを分かるから

### 知らない動物で死なないで／からすまあ

「知らない動物(のまま)で死なないで」というふうに丸括弧内の補足をすれば、僕はこの短歌を理解の範囲内に収めることができる。「足音でわたしはわたしを分かるから」というのは経験に基づいた言葉だろう。過去にも「わたし」は「わたし」のことが「分か」らなくなって、自分自身を「知らない動物」のように思えたこと

があった。そんなとき「わたし」を「わたし」に戻してくれたのは「足音」だった。つまり、歩くことで、景色を変えてみることで「わたし」は「わたし」を取り戻した。だから、「わたし」が「わたし」のことを「分か」らなくなったときは、どこか別の場所へ移動してほしい、その場にとどまり続けて「知らない動物」のように思える自分のまま「で死なないで」という、「わたし」から未来の「わたし」に向けられたメッセージである、と読むことはできそうだが、補足をするのは正しくないのかもしれない。飲み込むのも飲み込まないのももったいない。そんな飴玉のような歌だ。

翼と糞ってぱっと見ちがいが分  
からないそういうものかもしれない  
おれらは／白野

物体としても、それが持つイメージとしても大きな差のある両者。「翼」は人の名前にも使われるほどポジティブなイメージだが、「糞」が人の名前に使われているケースは見たことがない。けれど、文字として目の前に並べられたとき、意味もイメージも違うのに造形が似ているため「ぱっと見ちがいが分からない」。そして、ふたつの文字を見ている「おれら」を見ている上位の存在から見れば「おれら」でさえ「そういうものかもしれない」。この流れでいけば「おれら」も、となりそうだが、「おれらは」と書かれている。すべての人間が「そう」かもね、ということではないのだ。「おれ」とおまえについては「そう」かもね、ということである。なぜなら「おれ」はすべての文字について「ぱっと見ちがいが分からない」わけではないからだ。「おれ」は「翼」と「糞」という組み合わせを見つけて、それを「おれら」に当てはめている。当てはめてはいるが、「おれら」を、文字と同化させているわけではなく、あくまでも文字は文字、おれらはおれらという線引きをしている。だから「おれらは」なのだろう。「も」としてしまえば、神から見れば人間もそうかもね、という話になってしまうが、「は」であれば、この組み合わせは、「お

れらは」という特別性が失われない。適切な助詞だと思う。このふたりは性格の全く似ていない双子や兄弟なのだろうか。

どうしても

### 茄子のかたちが許せない／真島しましま

この料理に「茄子」を使うなら千切りじゃなくて輪切りだろう、ということだろうか。カットされた「茄子のかたちが」気に食わない、というふうに読めば、まあそういうこだわりのある人もいるかもしれないな、と思える。が、「茄子のかたち」と書かれて最初に思い浮かぶのは「茄子」そのままの「かたち」である。だとすると、なぜ「許せない」のだろう。あの「かたち」が別の何かを連想させるからだろうか、としばらく考えていたのだが、理由は冒頭に書いてあった。「どうしても」なのだ。なぜ「どうしても」なのですか、と訊いても「どうしても」なの、と返ってきてそうな勢いがある。共感させるでもなく、納得させるでもない、ただただ駄々をこねている子どものようなこの句が「どうしても」胸に残った。

### ワッフルの部屋を一つずつ壊す／ベロニカ

「ワッフル」に「部屋」を見出したとき、それをどう伝えるかが難しいはずなのだが、作者はスマートに「の」で繋いで「ワッフルの部屋」と表現し、それに続く「一つずつ」で想像の補助をしている。こうすることで読者の焦点も「ワッフル」の格子模様にある四角のひとつひとつに絞られる。丁寧な設計だと思う。そして、食べる、を「壊す」と言い換えることによって、食べるという行為のうちの、噛むという外から見える部分、あくまでも他者が目にすることができる部分だけを描写することができているため、頭に浮かぶ映像としてもクリアになった。また、「一つずつ」は「壊す」にも効いていて、工事のようにがつつ食べ進んでいるわけではなく、ゆっくり味わっているという時間の経過をも表現している。「ワッフル」を食

べている、それだけのことなのだが、解像度を上げれば、こんなにも風景を一変させることができるのだ。

以上です。毎回バランスを考えているのですが、今回は短歌の評が多めになってしまいました。8月分も楽しみにしております。

木下龍也